

折に触れ 四字熟語

NO. 209 『胡蝶之夢』 こちょうのゆめ

< 意味 > 万物一体の境地。我と物とが一体の心境。転じて、人生のはかないたとえ。また、夢と現実との区別がはっきりしないたとえ。

< 出典 > 『莊子』^{そうじ}齊物論^{さいぶつろん}

昔者莊周夢為胡蝶。栩栩然胡蝶也。自喻適志与。不知周也。俄然覺則蘧蘧然周也。不知周之夢為胡蝶与、胡蝶之夢為周与。周与胡蝶則必有分矣。此之謂物化。

読み下し： 昔者莊周夢に胡蝶となる。栩栩然として胡蝶なり。自ら^{たのし}喻みて志に^{かな}適えるかな。周たるを知らざるなり。俄然として覺むれば^{きよきよぜん}蘧蘧然として周なり。知らず、周の夢に胡蝶となるか、胡蝶の夢に周となるかを。周と胡蝶とは、すなわち必ず分あらん。これをこれ物化と謂う。

通 釈： いつだったか、^{そうしゅう}莊周つまりこのわたしは、夢で胡蝶となった。ひらひらと舞う胡蝶だった。心ゆくばかり空に遊んで、もはや莊周であることも忘れ果てていた。ところがふと目覚めてみれば、まぎれもない人間莊周である。それにしても、莊周が夢で胡蝶になったのであろうか。それとも、胡蝶が夢で莊周となったのであろうか。現在の形の上からみれば、莊周と胡蝶とはたしかに別物であろう。だがそれは、事物の窮まりない変化の中における一様相にすぎないのである。

語 釈： 「胡蝶」は蝶。「胡」は「蝴」とも書く。

一 言： メルヘンチックであり、しかも哲学的な含蓄のある四字熟語だと思います。

参考文献： 岩波書店「四字熟語辞典」 徳間書店「莊子」